

人間仏教の百年の回顧と再考察

—太虚、印順、星雲を中心に—

何 建明

松森秀幸 訳

論文要旨

人間仏教^{じんかんぶつぎょう}は、ここ百年来、大陸と台湾の中国仏教の主流の流れであり、この十数年、学術界において非常に重要視され、真剣に議論された中心的テーマの一つである。本稿は、関連する議論について、太虚、印順ならびに星雲という人間仏教の思想家、また実践家として認められる三人を取り上げ、人間仏教百年の歴史の中のいくつかの重要な問題を検討し、百年来の人間仏教において、その三つの座標の歴史上の関係性とそれぞれの特徴を明らかにした。すなわち、太虚は現代

人間仏教運動の創始者であり、かつ思想家である。印順は現代人間仏教の学術的理想を提示した人物であり、かつ仏学家である。そして星雲は現代人間仏教運動の発展を推進した最も重要な実践家である。

序

ここ百年の中国仏教の人間仏教運動において、人々が最も注目する人物は、太虚、印順、星雲の三人である。なぜなら、かれらはそれぞれ、ここ百年来の中国の人間仏教運動において最も名の知れた創始者、思想家、

推進者であり、学術界における議論も、かれら三人と人間仏教との関係、あるいは、かれらの相互の関係性という問題に集中しているからである。本稿はわずかに歴史的角度からだけではあるが、太虚、印順、星雲を中心として、この議論をさらに進めて深く考察し、専門家からのご意見をたまわりたいと思う。

一、太虚と現代人間仏教運動

一九一三年初め、上海仏教界の釈寄禪（一八五一—一九二二）の追悼会において太虚が発表した「仏教革命の三大主張」⁽¹⁾から数えるなら、近代以降の中国人間仏教運動はすでに百年近くの歩みを経ている。もしかすると、なぜ人間仏教運動が太虚の「仏教革命の三大主張」から始まるのか、太虚は「人生仏教」を提唱したのではないか、と疑問に思う読者もいるかもしれない。確かに、太虚が生前に重視し、努めて提唱したのは「人生仏教」であり、「人間仏教」ではない。しかし、これは、後の人々の印象のように「人生仏教」と「人間仏教」に区別があるということを意味しているのではない。

印順は晩年にかれと太虚の思想の相違を区別するため、太虚が提唱したものを「人生仏教」と規定し、自身が提唱したものを「人間仏教」と規定した。その結果、現在の大陸・台湾の人の中には、ただ印順が提唱したものだけが「人間仏教」であり、太虚が提唱したものは「人生仏教」であると考える人もいるが、実は、これは歴史上に生じた一種の誤解である。

台湾の学者、江燦騰は次のように述べている。「印順法師は常々自分が提唱しているのは『人間仏教』であると述べているが、仏光山の星雲法師もまた自分が提唱しているのは『人間仏教』であるという。しかし、率直にいえば、両者の内容は一致しない。そして、『人間仏教』という語は、やはり印順法師が太虚の『人生仏教』を修正するために提出したものである。この説は、『人天乗』の中の『神通という色合い』を減少させるために、『阿含經』の中の『諸仏はみな人間の世界に出現する。最終的に天上において成仏するのでない』という教説に合致させるという思想的背景のもと醸成された」⁽²⁾と。

この学説は、印順の「氷雪の大地に種をまく愚かな男——『台湾当代浄土思想の新動向読後』」という文章に基づいている。この文章の中で印順は、太虚は晩年に「現在は『人生仏教』を宣揚しなければならぬ」と主張して「死を重んじ鬼神を重んじるような中国の伝統に対して『人生仏教』といったのである」と指摘している。そして、印順が太虚と異なるのは、次の三点であるとされる。第一に「大師は幾重にも重なり合った峰々であり、私は一人抜きん出た独立した峰である」。第二に「大師はあらゆる点から徹底して極めることに長けているが、私は区別することを重視する」。第三に「大師は『人生仏教』といい、私は『人間仏教』という。一般にはもっぱら死と鬼神を重視するが、太虚はとくに人生仏教を提示することで、これを対治した。それならば、仏教は人間を本とするのであり、天や神というように神格化すべきではない。鬼神の教えではなく、天神の教えでもない。鬼神化も天神化もしない人間仏教でこそ、はじめて仏法の真実の意味を明らかにできるのである⁽³⁾」。さらに晩年の人間仏教に関する重要な著

作である「契理契機の人間仏教」においては、「太虚大師は『人生仏教』（私はそれを進めて『人間仏教』と称している）を提唱したが、民国四〇年以前に、中国仏教界が受けた影響は僅かであった。台湾仏教は現在極めて大きな影響を受けている⁽⁴⁾」と言及している。

以上に引用した印順が晩年に著した二編の重要な著作からは、太虚が提唱する「人生仏教」と印順自身が提唱する「人間仏教」との違いについて、これを強調して区別しているのは、他の誰でもなく、印順自身であることが容易に見て取れる。つまり、太虚によって提唱された「人生仏教」、そして印順によって提唱された「人間仏教」という区別を最初に設定した人物こそ、印順であったのである。

もし印順の言う通り太虚はただ「人生仏教」とだけ主張したのであるとするなら、「人間仏教」は印順によって提出されたものとなるのだろうか。印順はすでに次のように述べている。「人間仏教という論題は、民国以来、徐々に掲げられてきた。民国二三年、『海潮音』は『人間仏教特集号』を出し、当時においてすでに多

くの人々の共感を得た。その後、慈航法師はシンガポールにおいて、仏教雑誌を編集して『人間仏教』と名づけた。抗日戦争期には、浙江省縉雲県でも小型の『人間仏教月刊』が出版された⁽⁵⁾と。

ここではひとまずその他の『人間仏教』刊行物の狙いがどうであったかという点について言及せず、ただ『海潮音』が出版した「人間仏教特集号」に限っていえば、この雑誌は民国二十三年（一九三四年）初めのものであるが、『海潮音』雑誌社はこの半年前に、すでに「人間仏教特集号」をまもなく編纂出版するとの告知を発表している。一九三三年六月三〇日、『海潮音』雑誌社は「『人間仏教』特別号、原稿募集のお知らせ」を発表した。ここには「釈迦牟尼仏は、人間の世界にお生まれあそばされ、その教化の対象は人間を中心とされた。ゆえに一、二の振る舞いも、すべて人・法にわたって示され、人生の光明の道を指し示された。まさに人間の世界の大導師である。そこには奥深く神秘的で悟りがたいという色合いはなく、乞食を行じ、深く社会に関わっている。人間の社会を基盤としてるのである。

大乘・小乗の経・律・論の三蔵には、すべてにこの本意が満ちている。しかし、後の世に至ると、仏教を持つ者は釈迦牟尼仏の智力をもたず、奥深く図りがたい幕のようなものによって覆ってしまった。仏教は人間の世界以外のものとなり、ほぼ人の世を離れて、空門に隠棲するもの、いや、仏と無縁のものとなってしまった。そして仏教は空想上の、人間の世という基盤を持たない足のないお化けに変わってしまった。一部の消極的な世を厭い人生を悲観する要求に応じているといっても、それは仏教における方便であり真実ではない。釈迦牟尼仏がこの世に出現した根本の目的に大いに背いているのである」と記されている⁽⁶⁾。

以上の文章からは、『海潮音』の編者が、非常に明確に仏教を仏陀の人間の世における教化とみなしており、仏教は人間の社会を基礎とするもの、人類を中心とするものであり、仏教を人間の世界以外のものに変えてしまうというやり方を根本から否定していたことがわかる。そしてさらに、仏教も一部では消極的に世を厭い、人生を悲観するという要求に応じているとはいっ

ても、それは方便であり、仏教の本質ではないことを強調している。これらの観念は、事実上すでに現代の人間仏教の本質を明らかにしている。すなわち、人間の世界以外における仏教に関するあらゆる本質的な規定を根本から否定し、ただ、仏教の本質とは人間の社会を基礎として、人間を中心とするものであって、その他の一切の仏教形式はすべて方便に過ぎず、仏教の本質ではない、ということだけを認めるのである。ここでの「人間仏教」についての説明には、印順が指摘するような「天化」・「神化」という傾向はなく、また「鬼（訳者注：幽霊・妖怪のこと）化」・「非人化」という傾向もない。言い換えれば、少なくとも印順が出家してまもなく、まだ普陀山で仏典を閲覧していた頃に、『海潮音』の編者は、すでに「人間仏教」についての本質的で非常に確実な説明を行っていたのである。『海潮音』の編者による「人間仏教」についての特徴的な説明は、太虚の「人間仏教」についての説明に相当影響されていたことは疑いない。太虚は『海潮音』の「人間仏教特集号」において、「どのように人間仏教を建設

するか」という講演を発表している。そこで太虚は冒頭に全編の主旨を示して次のように指摘している。「人間仏教の意味とは、人に人間を離れて神になったり鬼になったり、あるいは皆が出家して山林の寺院で僧侶になる、ということ教える仏教ではないことを示すことである。これは仏教の道理によつて社会を改良し、人間を進歩させて、世界を改善するにすぎない」と。⁽⁷⁾太虚は仏教自体に鬼化、神化の現象があるかないかについては意見を述べておらず、ただ仏教の社会的機能について、社会を指向し、社会を改良するという考えを提出しているだけである。しかしこれは、かれが仏教は鬼神化あるいは非人間化と一線を画すことができないと認識しているということだろうか、あるいは、仏教の中の鬼神化あるいは非人間化を肯定しているということだろうか。太虚は一九三二年に、ある人物の経文・呪文によつて国を救うというやり方に対し、「密呪すなわち八部衆あるいは夜叉衆を本位とする仏教」を知ること」とは、それがただ人間仏教の助行となることを知ることである」と指摘している。⁽⁸⁾その後

また、かれは印順のインド仏教の研究について「思うに、仏陀を本とすることは、仏陀の無上遍正覚と諸法実相の心境を顕彰することによって、果報から因行に遡ることである。すなわち流れ出る仏の華嚴によって、また一切の有情を陶冶し教化を積み時に合わせて種々の法門を施すことである。阿含経にはまた仏の三時の説法がある。すなわち晝には諸天、昼には人、晩には鬼神である。したがってその後に出現した大乘においては、みなその根本を有している⁽⁹⁾」と述べている。

実際に、太虚が言うところの「人間仏教」は、「人生仏教」に相對して言われるものではない。太虚は次のように述べている。「かれ（訳者注：印順）が、もし仏法があらゆる衆生に應じる中でも、特に人生を重んじるとするならば、それは本来、私が強く提唱するところである。たとえば、人生仏教、人間仏教、人間淨土^{じんかんじょうど}の建設、人乘より直ちに大乘に接続すること、人生の發展によって上に向かつて段階的に進み円満に至る、すなわち成仏することなどである。それならば、仏法は結局、『十方の器世間のあらゆる衆生の業果が相續する

世間』を第一基層とすべきである。そしてこの世間の中の人間の世界は特に美しい第二の階層であり、業の相續から解脱する三乗とあまねく有情を救う大乘とが必ず存在するはずである。原著では阿含経の『諸仏はみな人間の世界に出現する。最終的に天上で成仏するのでない』という断片的な言葉によって、仏法を他の有情界から切り離して、ただ人間の世界を本とする傾向だけを取り上げ、人を本とするという狹隘に墮している⁽¹⁰⁾」と。これは上述した『海潮音』の編者が述べる、仏教は人間社会を基礎とし、さらに人間を中心とするという教説と矛盾しない。太虚は続けてこう述べる。「そして現実の人間の世界の樂を求める者は、まさに仏法は儒家・道教に劣らず極めて重要であるという。このような者はたとえば、梁漱溟、熊子真、馬一浮、馮友蘭などである。そして未来の天上の樂を求める者は、まさに仏法はキリスト教・イスラム教に劣らず簡潔であるという。そうして仏法はまさに人間の世界から捨てられてしまはずである⁽¹¹⁾」と。これは実際には、仏教（法）は世間の法と完全に同等にみなすことはできな

いし、また出世間の法と完全に同等にみなすことはできない、ということを説明している。仏法が関心をよせているのは、宇宙と人生の問題である。人間の問題に関心をよせるだけではないが、仏教はとりわけ人生の問題を重視している。『阿含経』の中のいわゆる「諸仏はみな人間の世界に出現する。最終的に天上で成佛するのでない」とは、仏陀の教えや戒めが人生の問題をとりわけ重視していることを反映しているだけではなく、仏陀の説法が人間自身に限定されないということをも説明しているのである。

また上記の文に明らかなことは、「人生仏教」と「人間仏教」とは、太虚の思想において、けっして相対する概念ではないということである。まさに『海潮音』の編者が次のように言う通りである。「現代の環境は以前とすでに一線を画し、すべてが転換してしまった。人生のあらゆる問題はこの現実の世界から解決を求めるものであり、その他の神秘的な解決は必要としない。現実の世界の現実の生活に重きを置くことは、人間自身の問題への解答を重視することである。したがって、

それらをこの人間の世界を離れて、別の方法によって解決しようとするれば、当然、この現実的な人生の思想に適応しない。仏教それ自体について言えば、もともと対象の機感をみて教えを施すのである。現代の先進的な仏教徒は、人間の世間に立ち、人間の世間の文化・道徳・生活をすべて釈迦牟尼仏が指示するところの光明の大道に向かって前進させ、釈迦牟尼仏が出現したこの五濁悪世に大無畏・大勇猛の精神を回復させ、人間の世界に仏国浄土を建設すべきである」⁽¹²⁾。

太虚においては、「人間仏教」とは「人間浄土」の意味であり、人間仏教を建設することは、人間浄土を建設することであるのは明かである。つまり、人間の世界の仏教化を実現することとは、人間の社会を仏教化した仏国浄土に変えることである。そして人間仏教あるいは人間浄土を建設しようとするなら、人生仏教を提唱して、仏教を人生に実現させ、具体的な人間の仏教化に実現させ、人間の社会に実現させなければならぬ。人間の社会の一人ひとりの人生をすべて円満にしてこそ、はじめて真の人間浄土を建立することがで

きる。したがって、人間仏教は一種の理想的目標であるのであり、実際の実践方式ではない。そして「人生仏教」は、仏教が人生社会に合致した実践方式である。これは、人間仏教の本質は人生仏教であるともいうことができよう。人生において実現できない「人間仏教」は、一種の理想でしかない。太虚が論じる「人生仏学の大旨」とは、実は後に印順が強調する非鬼・非神（天）の「人間仏教」なのである。

太虚は次のように述べている。「仏法は、普遍的にあらゆる有情のためのものであるが、現代の文化に適応するので、まさに『人類』を中心として、時機に適った仏学を施すべきである。仏法は無限の生死の繰り返しがあるので、現代の『現実の人生化』に適応しているので、まさに『人類の生存と発展を探索すること』を中心として、時機に適った仏学を施すべきである。これは人生仏学の第一の意義である。仏法はまた無我という個人が解脱する小乗の仏学を許しているとはいえ、今は現代の人生の『組織の大衆化』に適応するので、まさに大悲大智という普遍的な大衆のための

大乘の法を中心として、時機に適った仏学を施すべきである。これは人生仏学の第二の意義である。大乘仏教は、あらゆる有情をみな成仏させるための究竟円満の法であるとはいえ、大乘の法にも円漸と円頓の区別がある。今、効果を重んじ、秩序を重んじ、証拠を重んじる現代の『科学化』に適応するので、まさに円漸の大乘の法を中心として、時機に適った仏学を施すべきである。これが人生仏学の第三の意義である。したがって『人生仏学』とは、『天』や『鬼』を一時的に設置することを論じないに等しい。さらに、『人生』からその完成を求め、人生を超え、人生を超えることを超えるように発達することは、一切の『天の教え』や『鬼の教え』などという迷信を洗い除くことである。すなわち、現代の『人生化』、『民衆化』、『科学化』を基礎とし、その基礎の上に無上正遍覚へと向かう円漸の大乘仏学を建設するのである⁽¹³⁾』と。それゆえ、大醒は「人間仏教特集号」の「あいさつ」において、とくに以下のように指摘している。「人間仏教とは、もともと本雑誌が最初に編集されてから今に至るまでの一貫した主

張であるが、それをタイトルにしていなかっただけである。本雑誌の命名は、『人海の思潮の中の覚音』の意味である。また本雑誌の宗旨は、『大乘仏法の真義を發揚し、現代人の心を正しい思想に導かねばならない』である。十五年来、本雑誌はすべてこの一貫した宗旨によって、現代人の心を正しい思想に導くために、大乘仏教の真実の意味を發揚してきたのである。その責任はまだ果たしたとはいえないが、その精神はいまだかつて怠惰であったことはない。この十五年来、我が国で仏法を学ぶ人士が増加したという点からみれば、本雑誌と直接的にも間接的にも極めて大きな影響があるといえる。しかし、本雑誌は決してこのわずかな功德の結果で満足することはない。したがって、なお全国の大善知識の知力を集め、本雑誌によって人間仏教の完璧な道場の建設を進めるべきである⁽¹⁴⁾と。

実のところ、ここでさらに推測すれば、太虚が『海潮音』を創刊した宗旨とは、まさにかれが初期に提出した「仏教革命の三大主張」の中の「教理の革命」の主張に由来しているといえよう。⁽¹⁵⁾

二・印順と人間仏教の学術的理想

印順の人間仏教概念は、一九三〇年代末から四〇年代初めにかけての重慶市北碚区の漢藏教理院と、四川省合江県の法王仏学院とにおけるインド仏教史についての詳細な研究を基礎として打ち立てられたものである。印順は、仏陀の社会性の思想を最初に自覚した因縁について回想して述べている。「二七年（一九三八年）の冬、梁漱溟氏が来山し、かれが仏教を学ぶことをやめた理由について『この時、この地、この人』に合致していないからだ』と語った。私はこれを聞き、梁氏への賛意ばかりでなく、宋・明代の理学が仏教から儒教に帰着したことも、またこの考えに関係のないことではない、と深く思った。十方世界に遍在し、未来の彼方にまで、一切の有情を救済する仏教は、心量すること広大であり、尽く善である。しかし、本末・先後を区別し、また使命を重視して遠きに致すという修行を行わずことなく、『三生取辦（三世のうちに成仏すること）』『一生円証（一生のうちに円証を得ること）』『即身成

仏（その身のままに成仏すること）を語って、大なることに従事して目前の成功を焦り、仏教は言葉が高尚であるが修行が低俗であると迷ってはならない。我が心は疑いが深く、極めて不安であった。時に唯識学を修め、その源を『阿含經』に求め、『諸仏はみな人間の世界に出現する。最終的に天上において成仏するのでない』という一句に出会い、心に感じるところがあった。釈尊の教法は、十方世界の中でもこの土を詳しく述べ、三世を立てて現実を重んじている。志は一切の有情を救済することであり、とくに人間を本としている。釈尊の真実の教えは、さきの末流の円融者とは異なり、とくに十方世界、あらゆる有情について語るのである。私はこれを知り喜びきわまり感涙した⁽¹⁶⁾と。

印順は一九四一年、漢藏教理院において、インド仏教の歴史、とくに釈迦牟尼の出家と伝教の本懐について継続的に深く研究して、「仏は人間の世にあり」という論文を著した。これは最も早く「人間仏教」を詳説した著作であり、かれの「人間仏教」思想の代表作となった。かれは「仏陀は『天界にあつては天界の衆生

であり、人界にあつては人界の衆生である』ので、どうして執着する必要があるか。しかし、そうとはいえ、私たちは現在、人間の世界にいたのであり、私たちは人間の世界における仏陀を認識しなければならぬ。仏陀は人間の世界の存在であり、私たちは仮の考えから離れて、仏が人間の世界に存在するという確実性を理解し、人間の世界の正しい見解としての仏陀観を確立しなければならない。仏とは人に即して成仏するのである。したがって世俗的な見解から離れ、仏陀の仏としての品格を探究しなければならないが、仏陀に直接見える体験をなすことである。すなわち、（天上ではなく）出世間の正しい見解としての仏陀観を把握することである。この二つが融け合つて隔たりがなくなることが、仏陀観の真実の姿である。大乘仏教の発展において、もし人乗によつて趣きを発する大乘があり、天乗によつて趣きを発する大乘があると言ふのなら、ならば人間の世界における成仏と天上における成仏とは、まさに明確な境界線がある。仏陀がどのように天上に祭り上げられようと、私たちはやはり人間の

世界に迎え入れなければならない。人間仏教の信仰者は、人間の世界か、天上かのどちらかであり、これ以外にあなたはどっちつかずでいる余地はない。仏陀の聖教を何度も読誦し、あなたの正確な仏陀観を樹立しなさい。『諸仏はみな人間の世界に出現する。最終的に天上で成仏するのではない』のだ」と述べている。

以上は、印順の人間仏教思想の初期の内容であり、この思想はかれが堅持し続けていくものでもある。この時点では、仏教は人間の世界にある、あるいは、仏陀は人間の世界にいるという思想があるだけで、「人間仏教」というかれが晩年に非常に強調した「独創性」のある概念については、まだ自覚的に具体的な解釈を行っていない。また全文を通して一箇所しか見出されず、それも単独で用いられるものではなかった。しかし、かれが時代に応じて明らかにしたところの、仏教あるいは仏陀は人間の世界にあり、最終的には天上で成仏するのではないという概念については、実はかれが人間仏教を論じる十数年前に、太虚や大醒によって、すでにより明確により深く説き明かされていたの

である。当然、印順は太虚の学生であり、かれは太虚

に対して一貫して極めて大きな敬意を払い続けている。

太虚の逝去より印順の晩年に至るまで、かれが書いた多くの著作では、専らかれと太虚との因縁、とりわけ

太虚の人生仏教がかれに与えた深い影響と啓発とを述べている。しかし、だからといって、印順の人間仏教

の学術的研究に太虚と異なるところがあることを認めない、ということではない。なぜなら、印順は結局は

一人の仏教学者なのであり、かれのインド仏教の歴史的研究、とくに原始仏教と初期大乘仏教の研究は、空

前の水準にまで達している。これは太虚が及ばないところであり、実際に学術的側面において太虚の人間仏

教思想に不足している歴史的なアプローチをしばしば補っている。しかし、かれが人間仏教思想という側面

において太虚を超えたかどうか、また一部の現代の学者や仏教界の人物が称賛するような「人間仏教の父」

あるいは「玄奘以来の第一人者」となったかどうかは、検討を要する。太虚と印順の同門の先輩である大醒や

法舂らはみな印順が及ばないところである。太虚の人

生仏教に関する体系的な論述は、現代の人間仏教思想の最も核心的な内容であり、現在に至るまで重要な理論的意義と現実での指導的意義を備えている。印順は歴史性において貢献をなしたのであり、仏教思想の歴史の変遷の中から人間仏教の歴史的根拠を探究し、法と律の合一、縁起と性空の統一、自利と利他の合一によって、人間仏教の理論的原則を確立したのである。

太虚はかつて「私の仏教革命失敗史」という論文を著したが、このことは、太虚の仏教改革運動が、印順の述べたような「民国四〇年以前に、中国仏教界が受けた影響は極めて僅かであった」という状況と同じであったということの意味しているのではない。民国の初めに太虚が提出した叢林の学院化と学院の叢林化という改革思想は、一時期、保守派の寺僧からの強烈な反対と抵抗に遭ったが、武昌仏学院の創設以降、各地の寺院が創設する新しいタイプの仏学教育機関が陸續と出現した。太虚が雑誌『海潮音』を創刊してからは、各地で創設された仏教雑誌、例えば『現代僧伽』・『人海灯』・『師子吼』・『覺音』などという新時代の僧侶に

よる刊行物が大量に創刊された。一九五〇年代以降、海峡兩岸で弘法、衆生利益において最も影響力があった高僧大徳たち、たとえば台湾の大醒、慈航、東初、印順、道安、演培、星雲、大陸の趙朴初、巨贊、法尊、正果、塵空、茗山、惟賢、雪煩、雪松、遍能、および、海外の竺摩、法舫らは、いずれも太虚の影響を受け、しかも「民国四〇年前」に成長していた人間仏教運動の自覺的な継承者あるいは宣揚者である。

一九二〇年代から三〇年代、新勢力の閩南仏学院と旧勢力の寧波觀宗学社は、それぞれ東南地区の新旧の僧教育の本拠地であった。閩南仏学院の創刊した『現代僧伽』（後に『現代仏教』と改める）は、觀宗学社と旧勢力の僧侶を保守的であると批判し、仏教革新を宣揚することをもって宗旨としたが、觀宗学社で学んだ青年僧侶が閩南仏学院にここがれて、かれらの多くが後に閩南仏学院の学僧になった。後にかくかくたる名声を得る黙如、戒徳、竺摩、心道らは、みな觀宗学社から閩南仏学院に移ったものたちである。それゆえ、法尊は太虚の「私の仏教革命失敗史」を読んだ後、感慨

深げに、「太虚」大師は生涯にわたり僧侶制度を整理し、寺院財産を保護し、僧教育を創設するために奮闘した。多くの挫折にあったとはいえ、「自ら失敗といったとしても、私はそれを成功と考える」⁽¹⁷⁾と述べている。

太虚と印順が現代人間仏教運動史に果たした貢献には違いはあるが、かれらはまた互いに補い合っている。太虚は徹底して究めること、新機軸を打ち出すこと、思想の建設に長けている。かれは二〇世紀の中国仏教史上におけるもつとも重要な思想家であり、中国仏教史上におけるもつとも重要な仏教革新家の一人である。

それゆえ、早くも一九三〇、四〇年代には、ある人によって中国仏教のマルティン・ルター、中国仏教史上の永明延寿である、とたとえられている。一方、印順は分析、考証、歴史的研究に優れている。かれは二〇世紀の中国仏教史上においても偉業をなした仏学家であり、中国仏教史上におけるもつとも傑出した仏教史学者の一人である。しかし、かれを「玄奘大師以来の第一人者」と称することは難しい。ちょうど台湾の学者、江燦騰が指摘しているように、玄奘の主要

な貢献は、中国とインドの仏教文化の交流と、中国法相唯識学の創設、仏典の翻訳である。これらは印順の得意な分野ではない。つまり、太虚は現代の人間仏教運動の指導者であり、かつ偉大な思想家であって、印順は現代の人間仏教運動の推進者であり、かつ偉大な学者者なのである。

印順は、太虚が中国仏教をその本位として、何を何度も指摘している。つまり、太虚の人間仏教思想は中国仏教の良き伝統を徹底して究めたものである。かれのいわゆる「人成、即仏成（人格が完成して、仏は完成する）」という現代の菩薩行観は、中国の伝統的諸宗派が執り行う実践を継承し宣揚したものであり、現代の需要に合致したものである。これとは異なり、印順は中国の伝統仏教宗派に対して、非常に厳格な批判、ないし否定的な態度を取っている。かれは、自分の人間仏教思想と太虚の人生仏教思想の間の区別も主にこの点に現れていることを何度も強調している。印順は中国の伝統仏教の修行方式以外に、いわゆる「信・智・悲」の三つを兼ね備えた現代の菩薩行の実践方式を提

出している。しかし、長い時間をかけて中国社会に順応した中国の伝統仏教の実践方式を全面的に否定することは、必然的に印順の人間仏教理論を導き出すことになるが、それは社会に深く入っていく実践の方途を欠いてしまうがために理想化へと流れていくのである。

三・星雲と人間仏教の現代実践

近年、仏光山人間仏教研究室の釈滿義は台湾において『星雲モデルの人間仏教』という著作を出版し、人間仏教の「星雲モデル」を詳細に論じている。釈滿義はその著作において「星雲モデル」とは、星雲が独自に提唱、実践したものであり、どこか別の場所に起源があるのではなく、釈迦牟尼仏と星雲とに生まれながらにして備わる人間的性格があると明確に主張している。すなわち、次のように星雲の説話を引用する。「私の人間仏教の思想は、実は私の本来の性格である。まだ出家する以前から、私は、人に善をなし、善から流れるように、人のために考え、人に歓喜を与え、人々に合わせ人々を好み、人を助けることを楽しみ、

歓喜融和して、同じ体のように共に生きる、という性格であった」。「この思想と理念は、機会あるごとに徐々に実践に移した。決して他の誰かから影響を受けたのではなく、これは私に生まれながらにして備わった性格なのである」⁽¹⁸⁾と。つまり、星雲が指導する仏光山僧団が宣揚している人間仏教思想とは、その時代特有の性質を有しているのである。

若きより出家していた星雲は、太虚に対してこれまでずっと敬慕と崇敬の念を抱きつづけている。かれは太虚の人間仏教運動の中に中国仏教復興の希望を見出したのである。これは、星雲が一九六九年の太虚八〇年記念会において次のように述べているとおりである。「大師は、私がこれまでずっと仰ぎ尊び、また崇拜する長老であり、大師の人格と徳業、慈心と悲願は、これまでずっと私が心から慕い、学びたいと願うものである。まだ大師がご健在の頃に、私はしばしば次のような青年僧たちの声を耳にしたことを覚えている。『もし太虚が私に火坑に飛び降りると求めるなら、その理由を問わずに、私は必ず従うだろう』と」と。これをみ

ると、星雲と当時の志のある青年僧は、積極的に太虚の「仏教革命」の呼びかけに応じ、自覚的に太虚の仏教革命の経験と教訓を吸収し、大いに仏教改革活動を展開していたことがわかる。星雲は後に回想してこうも述べている。「二十歳の年に、私は仏教学院の門を踏み、不安定で仏教の地位が低落した情勢の時代に身を置き、社会の種々の危難を目の当たりにし、衆生の苦しみの叫びを耳にした。私も多くの血氣盛んな青年僧と同じく、仏教を改革するという満腔の志を抱いた。

それは、太虚の教産・教義・教理の『革命』を借りたものであったが、自身の地盤がなかったために、成功を目前にして失敗してしまった。したがって私と同門の僧たちは、喜んで南京の華藏寺を受け入れ、新しい生活の規約を取り決め、これによって叢林の僧団の道風を回復させようとした。しかしながら、これは一つの経文・懺悔の道場によってなされるものではなく、失敗はおのずと想像できる。これが私の生涯における初めての『革命』であった」⁽¹⁹⁾と。また青年時の星雲は、太虚が欧米を歴訪し、積極的に中国仏教の国際化を推

進したという古い書籍や雑誌を目にし、非常に感激して奮い立ち、無意識の内に仏教の国際化という理想を抱いていた。「一九三八年、太虚は遠く欧米に赴き弘法した。そして各地で『世界仏学院』や『仏教友誼会』を提唱、組織した。しかし結局、後継者がおらず、経費も足りなくなってしまう、その働きを十分に果たせなかった。若かった私が新聞・雑誌においてその事実を知ったとき、それがすでに歴史上の古いニュースであるとはいえ、なお心に比類のない痛恨の念を引き起こした。『仏教を国際化しなければならない』という理想は、これにより脳裏に深く刻まれ、私の生涯の闘争の目標となったのである」⁽²⁰⁾と。かれは招きに応じて太虚が創刊した『覚群週報』の主編を務めたが、「責任者が創刊者である太虚の本意に基づかなかつたために、私は袖を振って去るほかはなく、薄給にへりくだることとはなかった」⁽²¹⁾。後に、星雲は宜蘭（訳者注：台湾北東部）に渡り弘法しているが、太虚の仏教革命の精神はずっとかれを激励し続けている。かれは次のように述べている。「太虚が仏教に対して提出した興学理論とは、教

進したという古い書籍や雑誌を目にし、非常に感激して奮い立ち、無意識の内に仏教の国際化という理想を抱いていた。「一九三八年、太虚は遠く欧米に赴き弘法した。そして各地で『世界仏学院』や『仏教友誼会』を提唱、組織した。しかし結局、後継者がおらず、経費も足りなくなってしまう、その働きを十分に果たせなかった。若かった私が新聞・雑誌においてその事実を知ったとき、それがすでに歴史上の古いニュースであるとはいえ、なお心に比類のない痛恨の念を引き起こした。『仏教を国際化しなければならない』という理想は、これにより脳裏に深く刻まれ、私の生涯の闘争の目標となったのである」⁽²⁰⁾と。かれは招きに応じて太虚が創刊した『覚群週報』の主編を務めたが、「責任者が創刊者である太虚の本意に基づかなかつたために、私は袖を振って去るほかはなく、薄給にへりくだることとはなかった」⁽²¹⁾。後に、星雲は宜蘭（訳者注：台湾北東部）に渡り弘法しているが、太虚の仏教革命の精神はずっとかれを激励し続けている。かれは次のように述べている。「太虚が仏教に対して提出した興学理論とは、教

産革命・教制革命・教理革命である。これは私が最初に敬慕するところの仏教復興の不二法門となった。二十三歳の時に、台湾に渡って以来、人々の心は不安で、寄る辺がなくさまよう様を目の当たりにした。正しく信じるべき仏法は隠れて明らかではない。順を追って漸進的に仏教界の弘法の方途を改革しようとするなら、仏教を通俗化・大衆化・文芸化・生活化させて、衆生の利益を縦横に拡大できるように考えなければならぬ⁽²²⁾」と。

星雲の著作において、最も多く提示される名前は「太虚」かもしれないが、これは星雲が若い頃より、自覚的に太虚の新しい仏教思想の影響を受けていたことを物語っている。このような影響は当時、僧侶制度の改革の分野に多く見受けられたとはいえ、かれと太虚の新しい仏教思想との間の歴史的つながりは客観的に存在する。では、太虚の学生時代の後輩であり、また星雲より二十数歳年上である印順は、二十世紀の四〇年代にすでに人間仏教を明らかにしているが、かれと星雲との間にも歴史的つながりは存在しているのだろうか

か。印順が亡くなったときに、ちょうど大陸を訪問していた星雲は直ちに福嚴寺に弔電を送り、哀悼の意を示した。後に星雲は追悼の文を著し、この現代中国仏教史上において最も重要な仏学家を称えた。星雲はこの文章において次のように述べている。出家して六十年の生涯の中で、何度か仏教界の先輩の円寂に会い、心に感じるものがあつた。とくに悲しみに耐ええなかつた最初の人は太虚である。「このために、二日間食事ができず、ただ天地が暗く感じられた。憂鬱な心境は数ヶ月の長きにわたつた」。後に法航が太虚を継承して新しい仏教の中心的指導者になるだろうと期待されたものの、かれもまた久しからずして逝去するとは誰が知っていただろうか。「忽ちにして再び希望を失つてしまい、心に受けた衝撃は推して知るべしである」。その後、仏教界の大徳、たとえば慈航、南亭、東初、法尊、証果、虚雲、円瑛らの逝去に、星雲は世の中の無常を嘆いた。「しかし、太虚、法航法師の円寂のように私を感傷的にすることはなかった。なぜならかれらは仏教の中心的指導者になることができたからである。また

その後、北京の中国仏教協会の趙朴初会長が亡くなり、私はまた『人天眼滅』と嘆じ、中国仏教の悲運とした。いま「印順法師が円寂なされた。私はまた太虚、法航法師が往生なされたときと同様の悲痛な心境を抱いている」と。星雲は特に次のことを指摘している。印順がかれより二十数歳年上であり、前後して長年仏学院の教職を担い、印順が『太虚全書』を編纂したことは「さらに自分に敬服・尊敬の念を強くさせ」、『仏教概論』の出版後は、「人々はかれの原始仏教研究の深遠さを賛嘆せずにはいられなかった。まさに当代の仏学の權威たるに恥じない」。また印順の著作は陸続と出版されているが、星雲は「ほとんど読んでいないものはない。私は心より深くこの仏学に対して多大な貢献のあった長者に敬服しているが、私が推進する人間仏教は全てかれの影響を受けたものであるとは思っていない」と。⁽²³⁾

この星雲による印順への追悼文からは、星雲が太虚の後継者として印順がなした歴史的貢献を肯定していたこと、かれは印順に「心より深く敬服」し、長年、印順の著作を熟読していたこと、かれ自身も印順の思

想的影響をある程度受けていたことがわかる。しかし同時に、星雲はかれが人間仏教を推進するのは、決して印順の思想的影響が全てではないと強調している。この点は歴史的に見れば、客観的な事実である。

第一に、星雲の人間仏教の最も重視するものは、その僧団の建設と教団制度の創設の実践面を体现することである。この点は印順には見られない。

第二に、星雲の人間仏教は人間仏教の実践的性格を強調し、さらに仏陀の人間社会における教化の現代化と世界化という多元的な社会実践にまで充分に展開している。この点も印順には見られない。

第三に、星雲の人間仏教の理念は宗派性を打破し、諸宗をともしに弘めようとするものであるが、中国仏教の伝統を重視していることは変わらず、中国に伝わった大乘仏教の禅・浄土の修持の伝統を継承し、宣揚することに重きを置いている。しかし、印順は中国の伝統的な仏教宗派、および歴史上、盛んであった多くの仏教宗派に対して、批判的あるいは否定的な態度を取っている。

第四に、星雲の人間仏教は、現代仏教事業の展開、さまざまな新しい弘教方法と弘教事業の模索に重きを置いている。しかし、印順はただ理論上、多くの衆生を利益する弘教事業の重要性を強調しているにすぎない。

第五に、星雲の人間仏教は円融的であり、理にかなうことを重視するばかりでなく、創造的に機にかなうことを非常に重視している。しかし、印順の人間仏教の理念は理にかなうこと、特に原始仏教と初期大乘仏教の理を重視している。

上述の印順への追悼文において、星雲は特に趙朴初の逝去に対する極めて大きな悲しみに言及しており、趙朴初のように中心的指導者となることができる者は、実に得難いと考えている。事実、趙朴初は太虚の人間仏教の忠実な探究者であり、大陸における推進者であった。太虚は逝去する前にかれに会い、出版して間もない著作『人生仏教』を託し、かれが人生仏教の思想を発揚できるように望んでいる。⁽²⁴⁾かれは太虚の教導をしっかりと記憶し、大陸の改革開放以降、大陸仏教界と導き、太虚の提唱した人間仏教の宣揚を一生の仕事と

した。それゆえ、星雲はかれと太虚、法航ならびに印順とを同等に位置づけ、これらの現代人間仏教運動の巨人との間に深い歴史的なつながりが存在していることを示すのである。

四・結語

ここ百年来の太虚、印順、星雲および趙朴初らの間の歴史的つながりを明示するには、かれらの間の前後関係という歴史的なつながりではなく、必ずかれらの間の自覚的な継承・発展の関係を明らかにしなければならない。しかし、ここ百年来の中国の人間仏教の潮流を顧みるのに、わたしたちは異なる歴史的段階の後関係という歴史的つながりを完全に無視したり、軽視したりすることはできない。そして、このような歴史的関連性を通して、わたしたちは人間仏教がここ百年来最も意義のある中国仏教復興の潮流であり、未来の中国仏教がさらに現代化、世界化を進めるための重要な動向であるとみなすことができるのである。

ここ百年の人間仏教の回顧を通して、太虚が中華民

国初期に提唱した人生仏教という新思想と、かれが推進した仏教の「三大革命」運動とに、侮つてはならない重要な歴史的意義と現実的意義が備わっていることを、より明確に見出すことができた。また、印順と星雲が現代中国仏教復興運動において果たした重要な歴史的貢献を認めないわけにはいかないし、太虚との面識や、直接的影響、間接的影響のあるなしに関わらず、多くの太虚の継承者が、人間仏教運動の現代化と国際化に果たした多くの歴史的貢献も認めないわけにはいかない。したがって、印順、星雲、太虚、この三者の人間仏教の違いをどのように区別しようとも、すべて太虚が現代の人間仏教の思想とその革新運動とを切り開いたこと、また人生仏教という現代の人間仏教の本質を深く明らかにしたことを認めないわけにはいかないのである。これは近代中国仏教文化復興運動の最も重要な歴史的遺産である。

人間仏教の創始者は間違ひなく釈迦牟尼仏である。『海潮音』『人間仏教特集号』には、「人間仏教の教主、釈迦牟尼仏」の立場が非常に明確に表明されている。

また印順は『阿含経』の中から人間仏教の初期の根拠を見出し、またその立場を表明している。そして、星雲はここ数年来、人間仏教の創始者は、太虚ではなく、六祖慧能でもなく、ましてその他の人でもなく、仏祖釈迦牟尼であることを、改めて強調している。しかし、これは「人間仏教」という概念が釈迦牟尼仏の時代にすでに提出されていたということを意味しているのではない。「人間仏教」とは歴史的産物であり、釈迦牟尼仏の人間社会における教化という、その思想的側面と、人間社会を浄土にしようとする、その理想的側面とを現代的に表現したものである。それゆえ、人間仏教は釈迦牟尼の仏教に由来するが、一種の社会文化運動ならびに宗教振興運動として、近代の太虚により創始されたものである。そして後の大醒、法航、東初、印順、趙朴初、星雲、竺摩、覺光、永惺、聖巖、証嚴などの国内外の高僧大徳たちによって強力に推進され、ここ百年来の中国仏教復興運動の主要な趨勢の一つとなり、また現代の世界的宗教運動の重要な潮流の一つとなった。これはまた中国文化が復興し、さらに世界

に向かつていくという、重要な趨勢なのであり、顕著な標識なのである。

注

- (1) いわゆる「仏教革命の三大主張」とは、太虚が仁山と一九一二年に仏教協進会を組織した際に提出した仏教改革の目標である。太虚は次のように述べている。「私は仏教協進会が定めた規約と宣言について、極めて平和的であるが、ある演説で仏教に対して三つの革命を提唱した。一つには教理の革命、二つには教制の革命、三つには教産の革命である。第一に教理の革命については、当時の『仏学叢報』では反対が多かった。私は今後の仏教は現世の問題に多く注意を払うべきであり、ただ死後の問題だけを探究すればいいわけではないと思う。過去の仏教は帝王によって、鬼神・禍福を用いて愚かな民衆を作りだすための道具とされた。今後は宇宙や人生の真相を究明するために、世界人類を指導することで前向きに発展し進歩していくように「教理を」用いていくべきである。要するに、仏教の教理には、現代の思潮の底流に合致する新しい形態があるはずである。死に執着する者は医学によって病状を変えることはできないのである。第二に、仏教の組織について、とくに僧制は改善されるべきである。第三に、仏教の寺院財産について、十方の僧俗の共有財

産にすべきである。すなわち、十方の相続は、剝派と法派とが遺産を継承する私有独占の悪習を打ち破って、それにより有徳の長老を供養し、青年僧侶の人材を育成して、仏教の各種教務の働きを振興する必要がある」と。しかし、この主張が本当に影響を与えるようになるのは、一九一三年二月二日の上海仏教界とその他の各界が寄禅和尚を追悼した大会において、太虚が正式に提出して以降のことである。『太虚全書』精装本第二九冊（台湾善導寺仏経流通処印行、一九九八年）、七七頁。

- (2) 江燦騰『当代台湾人間仏教思想家』（台湾新文豊出版公司、二〇〇一年）、五頁。

- (3) 印順『華雨集』（五）（台湾正聞出版社、一九九三年）、九九―一〇一頁。

- (4) 印順『華雨集』（四）（台湾正聞出版社、一九九三年）、五頁。

- (5) 印順「人間仏教緒言」（『妙雲集・仏在人間』所収、台湾正聞出版社、一九九二年）、一八頁。

- (6) 「人間仏教」特別号、原稿募集のお知らせ」（『海潮音』第一四卷、第七期、一九三三年七月）、三頁。

- (7) 太虚「どのように人間仏教を建設するか」（『海潮音』第一五卷、第一期、一九九三年一月）、一一頁。

- (8) 太虚「時事新報のいわゆる経呪救国を論ず」（『海潮音』第一三卷、第九期、一九三三年九月）、二八七頁。

- (9) 太虚「再びインドの仏教を論ずる」（『海潮音』第二六

卷、第十期、一九四五年一〇月、一六三頁。

- (10) 太虚「再びインドの仏教を論ずる」(『海潮音』第二六卷、第十期)、一六一頁。

- (11) 太虚「再びインドの仏教を論ずる」(『海潮音』第二六卷、第十期)、一六一頁。

- (12) 「人間仏教」特別号、原稿募集のお知らせ」(『海潮音』第一四卷、第七期)、三頁。

- (13) 太虚「人生仏学の説明」(『海潮音』第九卷、第六期、一九二八年六月)、五八五頁。

- (14) 大醒「人間仏教特集号あいさつ」(『海潮音』第十五卷、第一期)、九頁。

- (15) 太虚の現代仏教改革運動についていえば、早くは辛亥革命以前に既に始まっていた。彼は一九四〇年に漢蔵教理院の夏期訓練班において「私の仏教改革推進運動略史」を講ずる中で提示しているが、宣統二年、すなわち一九一〇年には、彼の仏教革新思想を自覚的に生み出し、「あのときの、私の仏教の改革推進についての思想とは、どのような仏教の真理に基づけば、現代の国家と社会に適応し、衰退している仏教を復興させられるかというものであった」と述べている。

- (16) 印順「インドの仏教自序」『印順法師仏学著作集』C版を参照。台湾財団法人印順法師文教基金会出版。

- (17) 法尊「『太虚大師仏教革命失敗史』を読んで」(『法尊法師仏学論文集』所収、中国仏教文化研究所、一九九〇年)、二八四頁。初出は『海潮音』第一九卷、第四

期に掲載。

- (18) 満義「星雲モデルの人間仏教」、十三頁。

- (19) 星雲「往事百語—老二哲学」(仏光山宗務委員会、一九九九年)、二二三頁。

- (20) 星雲「往事百語—永不退票」(仏光山宗務委員会、一九九九年)、九九頁。

- (21) 星雲「往事百語—永不退票」、四八頁。

- (22) 星雲「往事百語—老二哲学」、四五—四六頁。

- (23) 星雲「尊崇すべき当代の仏学泰斗——印順法師を偲んで」(『当代』第二百七十七期、台湾、二〇〇五年九月)、一三二—一三五頁。

- (24) 趙朴初は太虚の逝去四〇周年に際して次のように述べている。「師が亡くなる十日前に、電話で玉仏寺に呼ばれお会いした。欣然として何事もない様子で、著書の『人生仏教』をくださり、今後も護法に努めるよう励まされた。期せずして遂にこれが永遠の別れとなってしまった」(『法音』一九八七年第四期)

- (か) けんめい／中国人民大学仏教・宗教学理論研究所教授
(訳・まつもり ひでゆき／東洋哲学研究所研究員)

(本稿は、中国社会科学院世界宗教研究所発行『世界宗教研究』二〇〇六年第四期に発表された論文「人間佛教的百年回顧與反思——以太虚、印順和星雲為中心」を筆者の了解を得て翻訳したものです)